

Title	イスラーム神秘哲学における魂 (続) : モッラー・サドラ『神的明証』 (III.3.6-10) 和訳
Sub Title	Soul in Islamic mystical philosophy (continued) : a Japanese translation of Mullā Ṣadrā's Shawāhid al-rubūbiya III.3.6-10
Author	鎌田, 繁(Kamada, Shigeru)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2025
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.56 (2025. 3) ,p.223- 241
JaLC DOI	10.14991/005.00000056-0223
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000056-0223

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

イスラーム神秘哲学における魂（続）

——モッラー・サドラー『神的明証』（III.3.6-10）和訳——

鎌 田 繁

解題

本稿はモッラー・サドラーの神秘哲学体系を比較的小規模にまとめた『神的明証』 *al-Shawāhid al-rubūbiya* の部分訳であり、先に発表した「イスラーム神秘哲学における魂——モッラー・サドラー『神的明証』（III.3.1-5）和訳——」（『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第53号（2022）, pp.135-149）に続く第6イシュラークから第10イシュラークまでの翻訳である。これによって第3編第3章の全10節の翻訳が提供できた。翻訳の底本としたテキストは前記論文と同じサドラー・イスラーム哲学協会発行のものである⁽¹⁾。各節（イシュラーク）の概要を以下に記す。

・第6イシュラーク 真実の幸福について

存在には高下さまざまな段階があり、魂もそれに応じて異なる。快樂によって実現する幸福も魂の段階によって快樂も異なり、幸福も異なる。感覚的な覆いを取り去られると、最高の精神界が現れ、感覚的快樂を越えた快樂が得られ、知性に基づく幸福に至る。

・第7イシュラーク 不幸について

高位の段階の認知が本性的に欠落していること、悪をなす身体組織が魂を支配すること、不信仰によって叡知を否定すること、これらが魂の不幸を生み出す。

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第56号（2025）pp.223~241

・第8イシュラーク 不幸における人々の諸階梯

人間の本性は知性的形相を映し出す鏡のようなものであり、完璧に映し出すことが出来れば幸福を実現するが、5種の覆いがあり、妨げている。これらの妨げが消滅し知性と一体化すると魂は知識そのものとなり、あるがままの存在の形姿が顕現する。

・第9イシュラーク 不完全な中間の魂の様態と哲学者の想定する幸福と不幸

テミスティウスのアリストテレス理解に賛意を示し、魂は永続するという立場に立ちながら、確とした方向性をもてない中途半端な魂にも神の強い慈愛によって知性的な次元には至らないながら妄想的な次元で幸福を与えられる。しかし哲学者たち（イブン・スィーナーやスフラワルディーを引用）はこのレベルの魂の帰還を明晰に論じておらず、その理由として想像力による世界についての無知をあげる。

・第10イシュラーク 哲学者の所説の虚偽と論じ残されたこと

知性的な幸福は知性的存在者の認識とさまざまな本質の獲得にあり、肉体的な幸福は感覚的な欲望対象を体感することにある。不完全な魂は天球に宿るという哲学者の説があるが、天球は高貴な純粋な形相であり、不幸な者の魂が関係することはあり得ない。預言者の啓示を深く探求することによってのみ正しい道が開かれるであろう。

翻訳

/295/

第6イシュラーク 真実の幸福al-sa‘āda al-ḥaqīqīyaについて

どの魂の力qūwa nafsīyaのもつ快樂ladhdhaも善さkhayrもその力に相応するものの認知によ（って得られ）る。その苦痛/296/や悪sharrはそれに不相応なものの認知によ（って得られ）る。感覚ḥissの快樂はそれに相応する感覚対象maḥsūsの認知であり、また勝ち誇った怒りal-ghaḍab al-ẓafīrは復讐intiqāmにより、妄想wahmは期待raja‘、記憶ḥifẓは思い起こしtadhakkur（によるの）

である。

次いでこれらの諸力quwāがこれらの諸観念ma‘āninに関わるならば、それのとりもろもろの段階marātibはさまざまmutafāwitaである。その存在はより強く、その完璧さはより高度で、その求めるものはより不可欠alzamでより持続的adwamであるようなもの、そのようなものの快樂はより強烈ashaddである。どの快樂もロバがその腹（食欲）や陰部（性欲）にもつようなものではなく、先行し近侍する原理（的存在者）al-mabādi’ al-sābiqūn al-muqarrabūn たち（天使たち）には（ロバの段階の）快樂も幸福も全くないといえるであろう。

次いで完璧さkamālや相応した「もの」amrは認知力al-qūwa al-darrākaには容易く（認知）できるであろう。その場合、その（認知の力）がその（完璧なもの）を妨げたり排除したりするとすると、それ（完璧さ）を嫌悪し、その反対を好むことになる。ちょうど病人のなかには（健康な者が好む）甘い食べ物嫌いその反対のものを好む者がいるように。あるいはまた、その完璧さであることの反対から試練を受ける（不完全なものに苦しめられる）とすると、そのような状態が続く限り、あなたはそれ（完璧さ）を感じ取ることはないだろう。

このことが確立することになれば、我々は次のように述べる。理性的魂al-nafs al-nāṭiqa、それに特有なその（魂の）完璧さとは、それが普遍的知性al-‘aql al-kullīとひとつになることである。その（理性的魂）のなかで全てのものの形相ṣūra al-kull、最も完全な秩序al-niẓām al-atamm、全てのものの始原から溢出する善が確立するのである。（その善は）もろもろの知性‘uqūl、魂nufūs、自然ṭabā’i、天球や元素的な物体al-ajrām al-falakīya wal-‘unṣuriya、ついには最後の存在に至るまで行き渡っている。かくてそれは、全てのものの形姿hay’aがそのなかにあるその実体によって知性的な世界となる。「かれらは喜んで、自分の人々の許に帰るであろう」（Q.84:9）⁽²⁾。

この完璧さが他のすべての力quwāに熱愛されるもろもろの完璧さと比べてみると、偉大さ‘azama、強さshidda、持続性dawām、そして不可欠性luzūmにおいて、それ（完璧さ）がそれら（もろもろの完璧さ）ともつ関係nisbaは、

知性が感覚的な、獸的な、怒りのもろもろの力ともつ関係に類似している。しかしながら我々はこの我々の世界のなかにおり、すなわち、我々は身体 *badan*、身体的な我々の諸感覚 *hawāss*、そして現世的な我々の関心 *aghrādunā al-dunyawīya* に取り込まれているのであり、我々のなかで、彼の魂 *nafs* から /297/ 情欲 *shahwa* の縄を、彼の首から怒りの首飾りを、彼の目から無批判的盲従 *taqlīd* の覆いを、(それぞれ) 取りはずし、彼の悪魔のささやきを拒む者だけが、それら (の完璧さ) を激しく恋焦がれるのである。さまざまな疑いが雲散霧消し探求していたものが明快になると、最高の精神界 *al-malakūt al-a'lā* のもの *shay'* を目の当たりにする。その快楽から薄弱な譬えを見出すことができる。その快楽はこの世界のもろもろの快楽、(例えば) 幸せな結婚 *mankah hanī'*、美味しい食事 *maṭ'am shahī*、素晴らしい住まい *maskan bahī*、(これら) のどの快楽よりもすぐれている。

もしもあなたがすぐれた魂 *ālī al-nafs* をもち、諸問題のなかの困難なものに没頭している際には、目の前に美味しい食べ物が現れたとしても、あなたの努力を無にすることなく、それを探求することをやめ中途に残すことはないだろう。この世の情欲は軽んじられるのだ。あなたが思うことは、あなたから身体 *shaghr al-badan* が脱落し、あなたとあなたの知性的な「それ性」 *huwīya* ⁽³⁾ との間の帳が上がり、あなたはあなたの理知 *dhihn* によって精神世界 *ālam al-malakūt*、持続的統合 *dawām al-ittiṣāl* へ上昇するのだ。なぜなら魂は既述のように永続するのであり *bāqiya*、能動知性 *al-'aql al-fa'āl* もまた永続し、その (能動知性) 方面からの溢出 *fayḍ* は不断に与えられるからである。

この来世的幸福 *al-sa'āda al-ākhirā* は感覚が獲得する欠点 *naqā'is* や邪惡 *āfāt* によって汚された快楽とは比較できない。このゆえにハディースに以下のようにある。すなわち、「来世の生活の他には生活はない」⁽⁴⁾。

現世に関わっているかぎり、魂には知識や真知の認識が不可能である理由は、ブーリームース *Būlīmūs* ⁽⁵⁾ の病によって食べ物の快楽を獲得することがないように味覚に生じる麻痺のようなものである。

知性的力の本性 *ṭibā' al-qūwa al-'āqila* が必要としているものである真知 *ma'ārif*、それは神とその天使たち、そのもろもろの聖典、その使徒たちにつ

いての知識であるが、(そういう真知)が不可避免的にそれ(魂)に現れており、(魂)それ自体に存在していることになれば、描写ではその極限を認知できないような快樂がそれにはあることになる。真実の幸福はこれらの諸真実が実際に存在していることwujūdにあるのであって、それらを所蔵ikhtizānしたり保存inhifāzしたりすることにはない。それらを所蔵する際に魂に生じるものはそれらの薄弱な存在/298/のようなものである。そうでなければ、それらは存在の強いものであり、光明性の激しいものである。

この現世における真知は来世における覚知mushāhadaの種子である。完璧な快樂とは覚知の上に基づいている。なぜなら存在は快いものladhīdhでありその完璧さkamālはもっとも快いものaladhdhであるからである。

もろもろの存在wujūdātは互いに相違しており、それらのもっとも高貴なafḍalものは第一の真実al-ḥaqq al-awwalであり、もっとも低劣なものは質料hayūlā、運動ḥaraka、時間zamān、とそれに類するものである。幸福sa'ādātも高低さまざまである。これらの知性的な諸快樂は真実の知識al-'ilm al-ḥaqqīによって完璧となった魂のものである。それ(魂)が(真実の)知識'ulūmに与ることなく、しかしさまざまな悪徳から免れ、無批判的盲従taqlīdによって作り上げた想像による諸形象mutakhayyirātへ関心を向けられるようになるならば、快いもろもろの形相を想像することは遠くない。妄想が消えた後、それ(魂)がそれ(快い形相)を想像することはそれらの覚知へと引きずられていくのである。それはちょうど死の一種である眠りのなかにいるように。樂園について描かれた感覚的な形象maḥsūsātが彼の前に現れる。これは中間にいる者たちal-mutawassiṭīnや敬虔な者たちal-ṣāliḥīnの樂園である。それ(真実の知識による知性的快樂)は完璧な近侍する者たち⁽⁶⁾al-muqarrabīn al-kāmilīnの樂園である。

第7イシュラーク 幸福に対立している不幸shaqāwaについて

真実の不幸al-shaqāwa al-ḥaqqīyaについて、それは(1)高位の諸段階の認知に関する先天的な本性の欠落nuqṣān al-gharīzaによるものであるか、(2)法

に背いたり *fusūq*、悪を為したり *maẓālim* するような感覚的な不服従 *ma‘āšin* という身体的組織の（魂に対する）支配によるものであるか、（3）誤った見解による絶対者 *al-ḥaqq* に対する拒絶（不信仰） *juḥūd* と、詭弁的な *safsatiya* あるいは誹謗的な *mushāghhibīya* 教説をとおして叡知 *ḥikma* を否定すること、弁証 *jadāl* と無批判的盲従 *taqlīd* を通してある学派 *madhāhib* を偏って重視すること、（これらによるものか）である。（これらが生じるのは、）名声 *shuhra* と支配力 *riyāsa* を求め、通俗学者たち *jumhūr* が良しとするもので自ら驕り高ぶり、到達できないにもかかわらず伝承を固守することで妄想による完璧さを願い求める（ことによるのである）。/299/

第1類の不幸は死 *mawt* あるいは、苦痛を感じることなく肢体に発症する慢性病 *zamāna* の類である。

第2類の（不幸）は、激しい苦痛がともなう肢体のように苦しむ者の痛む「もの」 *amr* を認知することによるものである。この（苦痛に）押し拉がれた *inqihārīya* もろもろの身体組織は醜く、魂の実体 *jawhar* を苦しめ、その（魂の）真実相 *ḥaqīqa* と対立する。なぜならその真実相は身体とその肉体的欲望と怒りの力 *quwāhu al-shahwīya wal-ghaḍabīya* を力づくで支配する組織 *hay’a* をもつことを要求するからである。（魂は）それ（身体組織）に制圧され服従しその卑しい欲望の実現のためにそれに仕えるようになると、それはその（魂の）不幸、痛苦、悲痛を不可避にする。しかし、身体とその関わる働き *shawāghhil* とにそれ（魂）が向かって行くことはそれ（魂）にその結末の問題（絶対者への到達）を忘れさせ、自然に酩酊する *sukr al-ṭabī‘a* ことが（魂が）現在のその恥ずべき状態 *faḍīḥa* を感じなくさせているのである。身体の死によって、妨害物がなくなり覆いが取り除かれ目隠しが外されると、魂はその破壊的な組織によってもっとも激しい苦しみに遭う。しかしこの組織は魂の実体と無関係であり、それ（魂）に付随するものとも同様（に無関係）で、その強さと弱さ、その多さと少なさ、神が望むままに、そういった妨害物の違いにあわせてさまざまに、永続的存続 *dahr* のなかの一期間（魂）は死んだようになると言っていいただろう。「罪を犯した *fāsiq* 信仰者は火獄のなかに永住はしない」⁽⁷⁾ が言及される時、シャリーアが示しているのはこのこと

であるといえよう。

第3類の（不幸）は、本性的な不完全さであり、現世においてさまざまな知識を修め知性的完成 $al-kamāl\ al-‘aqlī$ を知り、獲得せんとその魂がそれ（知的完成）を願い求めるが、その後その獲得の努力が萎えてしまう。（知性的完成を実現するための潜在的能力である）質料的な潜勢態 $al-qūwa\ al-hayūlānīya$ が失われ、その代わりに悪魔性とひねくれ $i-wijāj$ の現勢態 $fī‘līya$ が彼に現れるのである。また彼の妄念のなかに誤った諸教説/300/が根づいてしまう。それは医者にも治療不能の魂の不治の病 $al-dā‘ al-‘ayā$ である⁽⁸⁾。

そこ（不治の病）から生まれる苦痛 $alam$ は快楽に対立しており、安楽 $rāḥa$ は（不治の病）の対立物 $muqābil$ （健康や平安）から（生まれるの）である。同様に、そのもの（知性的幸福）は相応しているもの $amr\ mulā‘im$ についてのすべての感覚よりも強大 $ajall$ である。同様に、火に触れて分解すること、激しい寒さに凍ること、鋸で（指を）切ること、高所から墜落すること、こういう感覚的に相応していないもの $munāfin\ ḥissī$ についてのすべての感覚よりもこれ（知性的不幸）は強烈 $ashadd$ である。現世におけるその苦痛を表象しないことの理由は我らはすでに述べたことである。これと、それに対立するものとの二者は、哲学者たちに知られている知性的な不幸と幸福とであり、我らは感覚的な報酬 $mathwabāt$ と罰 $‘uqūbāt$ の確定を、神がのぞむならば、近いうちにとりかかるであろう。

第8イシュラーク この不幸における人々の諸階梯について

知りなさい。人間の「それ性」 $huwīya$ は世界のなかで起きる様々な形相に向いている鏡のようなものである。知的な諸形相がそれ（人間の鏡）に明らかに映る妨げについて、私は5つの覆いを見ている。

その（覆い）の第1は、その（人間の）実体 $jawhar$ とその潜勢的なあり方 $kawn$ との不完全さ $naqs$ であり、それはちょうど溶解精錬し形を整え磨き上げる前の鏡の鉄のようなものである。

第2（の覆い）は、その（人間の）実体を汚すさまざまな情欲や罪の汚れで

あり、これは真実ḥaqqがそこに現れるのを妨げる。それは鏡の錆ṣada'や汚れṭaba'のようなものである。

第3（の覆い）は、真実in ḥaqā'iqの世界を捨て生活の便益を目指すことであり、敬虔な行いに対する彼の関心ḥammやそれに対する研究tafaqquhは根絶し、その詳細について思索を巡らすこともなくなる。それはちょうど301/（写し出す）形相の面に向かって置かれずにあらぬ向きに対して置かれた鏡のようなものである。

第4（の覆い）は彼と求められている形相とのあいだに妨害物や覆いが置かれることであり、（その覆いは）最初の創造以来、無批判的盲従taqlīdと狂信ta'aṣṣubによって受け容れざるを得なくなるもろもろの教説i'tiqādātによって生じるのである。それはそのなかで確実なものとなり真実となってしまう。そして彼に対し真実を認知することを妨げるようになる。これは鏡と形相とのあいだに生じる壁のようなものである。ちょうど至高の方の言葉があるように、すなわち「その熱望するもの（信仰）とかれらとの間に、障壁が置かれよう。」（Q.34:54）

また至高の方の言葉：「またわれは、かれらの前面に障壁を置き、また背面にも障壁を置き、そのうえかれらに覆いをした。それでかれらは見ることも出来ない。」（Q.36:9）

第5（の覆い）は、最後には根源的な求める対象である、まっすぐな道al-ṣirāṭ al-mustaqīmの上の神的現前al-ḥaḍra al-ilāhīyaに到達するために、ある形相がある形相へと変化intiḳāl、変容irtiḥālしないことである。真実への導きは、そこで導きが生じ最後に至るその方向に向かわない限り不可能である。この幸福は生まれつきのものfiṭrīyaではない。（神に）近づける（智慧）muqarrībātや先行する知識'ulūmなしにはそれを得られることはない。生まれつきのものではないどの知識も特別な条件のもとで組になった先行するふたつの知識⁽⁹⁾によらなければ得られない。三番目の知識はそのふたつの組から得られる。かくて真知の根本の無知や（真知の）秩序の様態kayfiya al-tartīb（についての無知）、そして最も近い道のうえであるものからあるものへと移ることがないことは、求められているものを勝ちとることの妨げとならざるを得

ない。

その譬えは、その（鏡）で自分のうなじを見ようと思う者の鏡にある。なぜなら彼は二つの鏡を必要とし、うなじの姿が（一つに）映され、そこからそれが別の（鏡）に映るような特別な位置にそのふたつを置くことで、彼はそれ（自分のうなじ）を目の当たりにすることができるのである。このように知識を役立てるには驚くべきいくつもの道/302/があるのである。鏡marāyā'や映し出されたそのさまざまな姿ashbāḥの物語のなかでなによりも驚くべきものである。

この場でそれ（鏡やその写像についての既述）の目的は、知的な幸福al-sa'āda al-'ilmīyaを妨げるものに対して我々が打ち出した単なる譬えであり、さもなくば、魂の実体はこれらの妨げがそれ（魂）から消滅し、それが知性と一体化した後は、それ（魂の実体）はそれが獲得した知識そのもの'ayn al-'ulūmとなる。

まとめると、人間のなかにある精神界の微細なるものal-laṭīfa al-malakūṭīyaは主のことamr rabbānīであり、神のもつ秘密のひとつsirr min asrār Allāhである。それ（精神界の微細なるもの）は生まれながらの資質によれば、存在しているものの諸真実の真知に適切に対応するṣāliḥaなのであるが、（そうなるのは、）あるものは無に染まっており、あるものは存在に染まっているようなこれらの「もの」umūrのひとつ——それらの最大のものは真実以外の妄想された形姿al-ṣuwar al-mawhūmaに関わることはishtighālである——で覆い隠されることiḥtijābことがないとしたならば、である。

このシャリーアの伝達者ṣāḥib al-sharī'a（預言者ムハンマド）からのハディースのなかに（このような言葉がある）「悪魔たちがアードムの子孫たちの心の上を回り続けていることが無かったなら、彼らは天の精神界を見つめたであろう」⁽¹⁰⁾。

以下で伝えられていることがそれを説明している。：彼は問われた。「神の使徒よ、神は地上でどこにいるのか？」彼は答えた「信仰のある彼の下僕たちの心のなかである。」⁽¹¹⁾と。また伝承khabar（聖なる伝承）のなかにある：「私の地も私の天も私（神）を容れることはない。私を容れるのは神を畏れる

私の下僕の心である」⁽¹²⁾。

(以下のことを) 知りなさい。この内的なまた外的な妨害が彼の理性的魂 *nafshu al-nāṭiqa* から無くなると、そこには物質界 *mulk* と精神界 *malakūt* の形相、またあるがままの存在の形姿 *hay'a al-wujūd*、が顕現する。かくて彼の本体のなかに「天と地程の広い楽園」*janna 'arḍuhā al-samawāt wal-'arḍ* (Q.3:133) をあなたは見るだろう。

真知をもつ者の王国 *mamlaka al-'ārif* はそれよりも大きい⁽¹³⁾。なぜならそれは物質界という世界 *'ālam* のみから成っているものであり、精神界の広さ *fusha* はもっと大きいのであるから。/303/

第9イシュラーク 不完全な *nāqīṣa*、また中間の *mutawassiṭa* の魂の様態と哲学者たちの見解によって想定されるその幸福と不幸について

不完全で、第一次的なもの *awwalīyāt*⁽¹⁴⁾ にいたるまでの知識すべてをもたないもの(魂)について、哲学者たちがそのことで異なる見解をもっていることはすでに述べた。アフロディシアスのアレクサンドロス *al-Iskandar al-Afrīdūsī*⁽¹⁵⁾ の伝える逍遙学派の師匠(アリストテレス)からの伝承 *manqūl* によれば、それ(魂)は滅びるもの *fāsida* であり、テミスティウス *Thāmistīyūs*⁽¹⁶⁾ の伝えるものでは、それは永続するもの *bāqīya* である。それが永続しながら、(魂)を苛む魂に関わる悪徳 *radhīla* や(魂)を悦ばす知性的な美徳 *faḍīla* がそこにまだ根を張っておらず、働くこと *fi'l* をしたり受けたりすること *infī'āl* もない状態 *ta'aṭṭul* はありえない。神の摂理(配慮) *'ināya* は広くに及び慈愛 *rahma* の面はずっと強いのだから。このような場合、形姿を表象する *yataṣawwaru* 類の妄想的幸福がそれ(魂)に与えられることは確かである。この状態で(魂)は絶対的には快樂を脱してはいないし、絶対的にそれを獲得してもいない。このゆえに、こう言われている：子供たちの魂は楽園と火獄の間にある⁽¹⁷⁾。

第一次的知的認識対象 *al-ma'qūlāt al-awwalīya* を表象する *taṣawwarat* が、その得られていないことで魂の苦しみを感ずるほどには理論的な諸真実 *al-*

ḥaqā'iq al-naẓarīyaへの願望を獲得していない、そういう普通の魂al-nufūs al-'āmmīyaに関しては——情欲と怒りの行いという罪から免れた魂であっても、不道德な反抗的なものであっても——哲学者たちḥukamā'はその最後のひとりまで、これらの魂の帰還ma'ādとその段階にある者たちを言説で明らかにしていない。なぜなら物質性を離脱したものの'ālam al-mufāraqātの世界に昇る段階ではなく、またそれら（魂）が生物の身体abdān al-ḥayawānātにもどるという言説も、それらは滅するという言説も、知ってのとおり、正しくないからである。

ある集団ṭā'ifaは次のような言説をせざるを得なくなる。すなわち、馬鹿者たちbulhや敬虔な者たちṣulahā'や禁欲者たちzuhhādの魂は空中で蒸気や煙で合成された物体jirmに依存しており、（その物体は）彼らの想像力の土台となり、妄想的な幸福が彼らに得られるようになる⁽¹⁸⁾。/304/それと同様に不幸な者たちのなかには妄想的な不幸をその（土台である物体）なかで得るのである。

ある集団は煙の物体についてのその言説を偽りだとし、天界の物体al-jirm al-samāwīについてはそれは正しいとする⁽¹⁹⁾。大宗匠al-Shaykh al-Ra'īs（イブン・スィーナ）はこの見解をある学者から伝えており、彼（その学者）は軽率にしゃべり散らすような者ではないlā yujāzifu fī al-kalāmと述べている。——それがアブー・ナスル・ファーラービーであることは明かである——彼（イブン・スィーナはその説）をよしとして言った：「彼（ファーラービー）が言ったのは真実であるように思われる（yushbah）」。

同様に『暗示の書』al-Talwīḥātの著者（シャイフルイシュラク・スフラワルディー）は不幸な者たち以外に関してそれを正しいとし、それをよいと認めた。そして彼は言った：「不幸な者たち、彼らには彼の考えでは光明的な魂と高貴な身体をもつ天の世界に昇る力qūwaはない。」⁽²⁰⁾

彼は言った：「（天界に昇る力はないので）その力qūwaは彼らに身体的な想像al-takhayyul al-jirmīを必要とさせた。月天falak al-qamarの下、（月下界の最上層に位置する）火の球状領域 kura al-nārの上に粉々にされていない球状の物体があることは不可能ではない。それはその魂と同類である。それは

エーテルathīrī界と元素的‘unṣurī世界の間の中間世界barzakhであり、彼らの想像の働く土台である。かくて彼らは彼らの悪しき行為から想像力を働かせ、例えば、燃え盛る炎nīrān、火を噴く鋭い牙をもつtalsa‘おろち、毒針をふりまわすtaldha‘サソリ、のみ込まされるザックーム（地獄の木）（の実）を生み出すのである。」

彼は言った：「これによって残っている輪廻の徒ahl al-tanāsukhに類する者たちは排除される。」

彼はこの見解を支えて言った：「私は次のことを疑うことはない——私が熱心に従った修練のゆえに——無知な者たちや破廉恥漢は、もしも彼らの諸状態を記憶しており、彼らの資性malakātと無知に従い、彼らの表象al-taṣawwurātを特殊化mukhaṣṣiṣaする、そういう身体的な力qūwa jirmīyaを離れることができたのであれば、（彼らは最大の霊al-rūḥ al-akbarに向かって進み救われたであろう。）」

これらはこれらのもっともすぐれた者たちal-afāḍilの言説である。すでに述べたことであるが、その基礎は、想像的な魂al-nufūs al-khayālīyaの帰還ma‘ādがそこで起きる別の世界（現世と来世の間の中間世界）の存在の無知にある。/305/

第10イシュラーク 彼らが述べたことの虚偽であることと彼らが注意を払わなかったことの指示について

不完全な魂の幸福sa‘āda al-nufūs al-nāqīṣaについて知性的な観点で彼らが認めていることに関してであるが、どのような快樂も、「全体は部分より大きい」、「1は2の半分である」、「あるものに等しいもの（の集合は、そのなかのどのものも）互いに等しい」と同じような第一次的な知的対象の認識idrāk al-ma‘lūmāt al-awwalīyaのなかにあるのであろうか？（そうではなく）むしろ幸福は、それが知性的なものであるならば、知性的なもろもろの存在wujūdātの認識とそれらの「それ性」huwīyātの獲得のなかにある。また（幸福が）肉体的なものbadanīyaであるならば、感覚的な欲望の対象al-mushtahayāt al-

ḥissīyaを体感することmushāhadaにある。このようにどの力qūwaの幸福もそれに対応するものの存在にあるのである。

幸福と不幸の中間にある者たちmutawassiṭīnについて彼らが認めていることに関してであるが、これらの諸知識について慣れ親しんでいる者には（以下のことは）隠れもないことである。すなわち、天界のsamāwīあるいは元素的な‘unṣurī物体jirmが魂の表象（作用）taṣawwurātの土台であることは、（魂）がその（土台）と自然的な結合‘alāqa ṭabī‘īyaをもつか、その（魂の）身体がその（土台）と位置的な結合‘alāqa waḍ‘īyaをもつかによらずしては成り立たないということである。この二つの結合をもたない場合は、どうして魂はそれを働かせたり関係をもつようになるのであろうか？（そういうことを魂はできない。）霊的な実体al-jawhar al-rūḥānīと創定的物体al-jirm al-ibdā‘īとの間に生まれる関係nisbaは何であれ、（その関係は）それ（実体）が他と異なる特性ikhtiṣāṣをそれ（物体）によって必然的にもつようにし、またそれ（実体）がその世界からそれ以外の物体ではない（まさにその物体である）それへ、あるいはむしろその物体の類にあるその他すべての領域とは異なるそれ自体の領域ḥayyזへ、と惹きつけられることinjidhābを（必然的に起こすのである）。形相をもった魂的な実体jawhar nafsānī ṣūrīに、完全な形相を完璧にそなえているが本体は元素的ではない物体jirm tāmm al-ṣūra al-kamālīya ghayr ‘unṣurī al-dhātとの自然的な結合を表象することはどうしてできるのだろうか？（それはできない。）前もって準備されたbil-isti‘dādではなく第一次的な溢出al-fayḍ al-awwalīによって、それが獲得した創定的なその形相以外には、姿や形を描き出し統御する者がそれを自由に操ることtaṣarrufは出来ないのである。どのような物的な質量mādda jismānīyaであれ、魂の力qūwa nafsānīyaのもつ想像力takhayyulの道具になるが、それ（質量）はそれ（魂的な力）とある種の統合ittiḥādとしてひとつになりtattaḥidu、またある種の完成istikmālとしてそれによって完成するtastakmiluのである。/306/かくてそれ（質量）はそれ（魂的な力）を潜勢性の境界から現勢性の境界へと想像の働きに合った影響や動きによって引き出すのである。天球はひとつの動きとしてしか動かない。（その動きは）類似的mutashābihaで位置

に従うもので、その（動きの）なかでそれ（天球）が模倣している魂の統率者mudabbir nafsānīから生じるそれ（天球）の魂的な動きに依拠している。

諸々の魂が本性上統御している（対象であるような、そういう）ものと位置的な関係をもっている鏡の類に、そのことがまた生じることはあり得ない。ちょうど、真実において、それを統御しているあなたの魂の鏡である、あなたの目と位置的な関係をもっている鏡の中に、ある形相が姿を現すように（はならないのである）。天球の物体al-jirm al-falakīやそれ同様のものはその二つの鏡のひとつ（目）のようには、統御するあなたの魂と較べることはできない。どうしてか？彼らにとって天界にあるものal-samāwīyātはその第一の原理（的存在者）mabādī'uhā al-ūlā以外に服従することはない。ちなみにそれは神の命によって天界を動かす天界の天使たちである。それらの形相（天界の諸存在者、天使）はそのこと（関係無い者が天球を動かすこと）を禁じており、また無理にそれ（神の命により動かすという天使の立場）に昇ろうとする者もないので、異質な影響al-ta'thīrāt al-gharībaを受けることはないのである！それらの身体abdānからの離存mufāraqaは別の身体をもつことはない。それ（身体）と高い位置の物体al-ajrām al-'āliyaとの間に位置的結合'alāqa waq'īyaを表象し、その（位置的結合）という原因によってそれ（離存のもの）はそれ（外界の身体）になる。ちょうど外界にある鏡のように、そこに映し出された想像力によるさまざまな形姿al-ashbāḥ al-khayālīyaが見られるようになるのである。次いでそれらが鏡であることを認めることで、どうして諸天球のさまざまな想像takhayyulātである写像muthulがこれらの魂のさまざまな想像そのものであるというのか？とくに彼らのなかの不幸な者たちashqiyā'や痛苦の懲罰を受ける者たちmu'adhdhabūnは（どうなのか？）彼らの破滅的な悪事と彼らの誤った信条'aqā'idから生まれた痛苦の形相al-ṣuwar al-mu'allamaを彼らは認知している。

天球の諸物体al-ajrām al-falakīyaについてのまとめ——それらを受け容れるものの純粹さとそれらの諸原理の高貴さのゆえに——現実al-wāqī'に応じた清純な形相以外のなものでもない。彼らが言ったことは完結していない。また天球の物体は不幸な者たちがそれで苦しむようなことに関わると彼らが

確言したことは正しくない。そのことが天球の物体に許されないのと同様に、/307/創定的な物体にも許されず、その（物体の）種^{naw'}はそれの個体^{shakhṣ}のなかで破壊されない。なぜならばかれらが表象したものに対して、それ（表象した「もの」）には、天球のように直線的な運動を妨げる第5の自然^{al-ṭabī'a al-khāmisa}⁽²¹⁾が必ずあるからである。かくてその（物体の）様態^{ḥukm}は、天球という名前と呼ばれようと呼ばれまいと、その（天球という）様態なのである。

不幸な者たちの魂の数はおそらく無限である⁽²²⁾。どうして有限な煙状の物体^{jirm dukkhānī}がそれら（魂）が無限の認識作用によって統御し表象するための土台となるのであろうか?!というのは最小限言えることは以下であるからだ。どの関係や表象に対してもそのなかには、それ以外のものに対してのものではない（特定のもののみに対して）ような、潜勢性^{qūwa}と準備性^{isti'dād}がある。かくてひとつの物体のなかに無限の集合した（なにかを働く）準備性が生じているということ。これは間違っていることが知られている。

このことが哲学者として名の知られたこれらの者たちの思索が目指したものである。それから逃れる道は、もし神が望まれるならば、啓示と預言に支えられた預言者たちにしっかりと縋ること以外にはない。

注

- (1) 鎌田繁「イスラーム神秘哲学における魂——モッラー・サドラー『神的明証』(III.3.1-5) 和訳——」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第53号(2022)の解題 pp.135-136及びp.147注(2)参照。
- (2) クルアーンの訳は『日垂対訳・注解 聖クルアーン』日本ムスリム協会、2004による。アッラーを神にするなど、訳語を一部変えたところがある。
- (3) 「知性のなかに生じる形相で、それが他のものと異なっているという点で捉えられたものが「それ性」^{huwīya}と言われる」。al-Jurjānī, *Kitāb al-Ta'rīfāt*, Ed. by Gustav Flügel, Bayrūt: Maktaba Lubnān, 1969 (repr. of Leipzig 1845), p.236.
- (4) Muḥammad Bāqir al-Majlisī, *Biḥār al-anwār al-Jāmi'a li-durar akhbār al-a'imma al-aṭhār*, Bayrūt: Mu'assasa al-Wafā', 1403AH/1983, v.20, pp.218. 預言者ムハンマドの言葉として「来世の生活の他には生活はない。おお神よ、アンサールとムハージ

ルーンを赦したまえ」とある。最初の句は含むが、一部語句が異なるハディースは同書v.20, p.225の他、*Ṣaḥīḥ al-Bukhārī*, Vaduz (Liechtenstein): Jam‘īya al-Maknaz al-Islāmī, 1421AH/2000, p.1303, no.6489, p.746, no.3842, p.574, no.2998, *Ṣaḥīḥ Muslim*, Vaduz (Liechtenstein): Jam‘īya al-Maknaz al-Islāmī, 1421AH/2000, p.790, no.4773など参照。

- (5) ユーナーニー医学（イスラーム文化圏でのギリシア系伝統医学）では、身体が食べ物要求しているのにもかかわらず、胃がそれを受け付けられない病的な状態と説明する。cf. “IUMT-5.7.35 Būlīmūs,” World Health Organization, *WHO international standard terminologies Unani medicine*, World Health Organization, 2022, p.269.
- (6) 「近侍する者たち」*muqarrabūn*はクルアーン56:11などに8例あり、天使を示すと説明されている。
- (7) この言葉は*al-Hikma al-muta‘āliya fī al-asfār al-‘aqlīya al-arba‘a (Asfār)*, Bayrūt: Dār al-Iḥyā’ al-Turāth al-‘Arabī, 1410AH/1990, v.9, p.135にも引用される。本テキストの下欄注6では、*Biḥār al-anwār*, v.8, p.351の参照をいうが、この言葉自体はそこにはない。ただ、ムーサー・ブン・ジャアファル（第7代イマーム）の言葉「神は火獄のなかには不信仰kufrや神の拒否juḥūdをした者、正道を外れるḡalāl者や多神教shirkの者以外は永住させない」や神の言葉「だがあなたがたが、禁じられた大罪を避けるならば、われはあなたがたの罪過を消滅させ、荣誉ある門に入らせるであろう」(Q.4:31)が引用されており、罪を犯しても信仰者であれば火獄に永住はしないという意味は引き出せるであろう。
- (8) この段落、文意不通。Jawād Muṣṭlif, *Tarjamah wa-tafsīr al-Shawāhid al-rubūbiya*, Tihrān: Surūsh, 1366AHs, p.369のペルシア語のパラフレーズを参照して仮訳として提示する。cf. Ibn Sīnā, *Mabda’ wal-ma‘ād*, Ed. by ‘AbdAllāh Nūrānī, Tihrān: Mu‘assasa-yi Muṭāla‘āt-i Islāmī Dānishgāh-i Makgīl Shu‘ba-yi Tihrān, 1363AHs, p.113.
- (9) 真知の根本と秩序の様態についての知識を指す。サブザワリーの欄外注は以下のようにいう。ふたつの知識のひとつは、哲学的な根本を獲得し神的な基礎を明らかにするため最高の知識*al-‘ilm al-a‘lā*、あるいは神秘道を進む者ahl al-ṭarīqaの方法で修練をして獲得される究極的な真知*al-ma‘rifa al-quṣwā*であり、その第2は秩序の様態を真に知るための秤の知*‘ilm al-mīzān*である。「叡知*ḥikma*と良い話し方*al-maw‘īza al-ḥasana*で、(凡ての者を)あなたの主の道に招け。最善の態度でかれらと議論しなさい。」(Q.16:125)、「また正しい秤*al-qistās al-mustaqīm*で計りなさい」(Q.17:35)要約すると、最高の知識は証拠の内容を獲得するのに不可欠であり、秤（の知識、すなわち、論理学）はその形相を獲得し最短の道程に進むために（不可欠で）ある。Ṣadr al-Dīn Shīrāzī, *al-Shawāhid al-rubūbiya bā Hawāshī Ḥajj Mullā Hādī Sabzawārī*, Ed. by Sayyid Jalāl al-Dīn Āshtiyānī, Mashhad: Dānishgāh-i Mashhad, 1346AHs, pp.716-717.
- (10) *Biḥār al-anwār*, v.60, p.332.このハディースは*al-Ghazālī, Iḥyā’ ‘ulūm al-dīn*, al-Qāhira: Mu‘assasa al-Ḥalabī wa-Shurakāh lil-Nashr wal-Tawzī‘, 1387AH/1967CE, v.1, p.305, v.2, p.375, v.3, p.19にも引用されている。ほぼ同様の内容のものがAḥmad ibn Ḥanbal,

Musnad, Ed. by Aḥmad Muḥammad Shākir, al-Qāhira: Dār al-Ḥadīth, 1416AH/1995, v.8, p.374 (No.8625) にアブー・フライラの伝えるより長いハディースの一部にある。

- (11) al-Ghazālī, *Ihyāʾ*, v.3, p.19の本文では、イブン・ウマルの伝えたハディースであるとする。しかし、同頁下欄の注(3)によればこの文字面でのハディースはみつからないという。
- (12) *Biḥār al-anwār*, v.55, p.39に神の語る聖なる伝承としてはほぼ同文のものを引く。al-Ghazālī, *Ihyāʾ*, v.3, p.19も神の語るkhabarとして引用。モッラー・サドラーが引く3つの伝承はガザーリーを参照して引いている可能性が高いように思う。
- (13) 文中の「天と地ほどの広い樂園」はmulkとmalakūtとを合わせたものを意味しているようにその文脈から考えられる。整合性を外れるが、「それよりも大きい」の「それ」はmulkとしてみ理解した「天と地ほどの広い樂園」の他に該当するものはなさそうである。サブザワリーは欄外注 p.717で、「真知をもつ者の存在が至高なる神の存在のなかに消滅fāniし、同様に彼の生命も彼(神)の生命のなかに、また彼の意思も彼(神)の意思のなかに(消滅する)。彼の属性のすべてを(神の属性のすべて)と較べてみなさい。彼の王国はかれ(神)の王国のなかに消滅する」と述べており、真知をもつ者が神のなかに消滅し、神のもつ括りが彼の括りとなったことで、「それ」が何を指示するにせよ、「それ」(ムルクとしての樂園)よりも大きなものであることは確かである。
- (14) 第一次的なものは定義や論証という獲得知によって得られるものではなく、直観的に人間の知性に生じる命題。「全体は部分より大きい」、「1は2の半分である」が事例としてあげられる。存在の概念mafhūm al-wujūdもそれに入る。A. -M. Goichon, *Lexique de la langue philosophique d'Ibn Sīnā*, Paris: Desclée de Brouwer, 1938, “‘AWWALĪYĀT”, p.142; Sayyid Ja'far Sajjādi, “awwaliyāt,” *Farhang-i 'ulūm-i 'aqlī - Shāmīl-i iṣṭilāḥāt-i falsafī kalāmī manṭiqī*, Tihārān: Anjuman-i Islāmī-yi Hikmat wa Falsafa-yi Irān, 1361AHs, p.110; Samīḥ Dughaym, *Mawsū'a muṣṭalahāt Ṣadr al-Dīn al-Shīrāzī*, Bayrūt: Maktaba Lubnān Nāshirūn, 2004, p.168.
- (15) Alexander of Aphrodisias. 西暦2世紀後半から3世紀初めに活動した逍遙学派哲学者。アリストテレスの著作の註釈者。イスカンダル・アフリードゥースイー al-Iskandar al-Afrīdūsīのような哲学者たちは、自然的形相(そこに質料的段階の知性が留まっているとしても)しかもたない人間の身体が減じれば、人間のなにも存続することはないという。これは聖法に反することになる。cf. *Asfār*, v.3, pp.486-487. 同書v.3, pp.428-433に知性の3類について述べた彼の論文が引かれている。“Alexander of Aphrodisias,” *Stanford Encyclopedia of Philosophy*, <https://plato.stanford.edu/entries/alexander-aphrodisias/> (2024.10.21閲覧)

- (16) Themistius (ca.317-ca.385CE) ギリシアの哲学者。アリストテレスのいくつかの著作のパラフレーズの著者として知られる。本文にもあるようにアフロディシアスのアレクサンドロスと知性(魂)の解釈を異にし、知性の永続性、不死の説はイスラームに受容され特別な影響を及ぼした。例えば、Robert B. Todd (tr.), *Themistius: On Aristotle On the Soul*, London/New York: Bloomsbury, 2014, p.128参照。該当箇所のアラビア語訳は M. C. Lyons, *An Arabic Translation of Themistius Commentary on Aristoteles De Anima*, Thetford: Bruno Cassirer, 1973, pp.186-187. テミステイウスについては Robert B. Todd, “Themistius,” *Catalogus Translationum et Commentariorum: Mediaeval and Renaissance Latin Translations and Commentaries* v.8 (2003), pp.57-102.
- (17) 行為責任taklifのない子供の魂の来世での扱いについては議論がある。親が信仰者である場合には親に従って楽園に入るとすることが多いが、親に信仰がない場合の子供は火獄、中間世界a‘rāf (cf.Q.7:46, *Asfār*, v.9, pp.316-318)、楽園、諸説ある。Q.52:21及び *Biḥār al-anwār*, v.5, pp.288-297, al-‘Allāma al-Hillī, *Kashf al-murād fi sharḥ Tajrīd al-i‘tiqād*, Ed. by Ḥasan Ḥasanzāda al-Āmulī, Qumm: Mu‘assasa al-Nashr al-Islāmī, 1407AH, p.318参照。
- (18) 知性の不完全な者の魂は肉体と離れた後も物体の助けが必要であり、それは天体jism samāwīやそれに類するものであるかもしれないとのべるイブン・シーナーの言葉 (*al-Ishārāt wal-tanbīhāt*, Ed. by Sulaymān Dunyā, al-Qāhira: Dār al-Ma‘ārif, 1994, v.4, pp.35-36) がある。それにナスィールッディーン・トゥーシーが註釈(同書v.4, pp.35-37下欄)を加え、想像力を支える土台となる物体が空気や煙から生じるとする説を述べているが、イブン・シーナー自身もこの説を述べている。Ibn Sīnā, *al-Mabda’ wal-ma’ād*, pp.114-115.
- (19) 注(18)で触れたように、空気や煙から生じる物体と魂は結びつくという説はイブン・シーナーも述べている。この段落で天体に依るだけという説を正しいとし、煙の物体についての言説を偽りとするのは、整合的に理解するのに苦しむ。また「ある学者」がファーラービーを指していることはトゥーシーがすでに指摘している。*al-Ishārāt wal-tanbīhāt*, v.4. p.36の下欄注。*Asfār*, v.9, pp.208-209参照。
- (20) これとこれに続く3つの引用はすべて以下による。ただし、この最初の引用は意味内容は同じととれるが、『暗示の書』のテキストとやや違いがある。Shaykh al-Ishrāq al-Suhrawardī, *Kitāb al-Talwīḥāt*, in *Majmū‘a-yi muṣannafāt-i Shaykh-i Ishrāq Shihāb al-Dīn Yahyā-i Suhrawardī*, v.1, Ed. by H. Corbin, Tih-rān: Anjuman-i Shāhanshāhi-yi Falsafa-yi Īrān, 1976, pp.90-91.
- (21) 月下界の自然的な存在者(鉱物、植物、動物)を構成する4つの基本的要素‘anāṣir, arkān, uṣṭuquṣātである火・空気・水・地に対して、天球の基本的要素として第5のものを数える。天球falakは第5の自然と呼ばれ、天体は月下界の自然的物体とは異なり、生成・生滅・変化・変質・増大・減少を受容せず、回転運動al-ḥaraka al-dawrīyaのみを行うとする。Sayyid Ja‘far Sajjādi, “ṭabī‘at-i khāmisā,” *Farhang-i*

'ulūm-i 'aqlī - Shāmil-i iṣṭilāḥāt-i falsafī kalāmī maṭṭiqī, p.335; *Rasā'il Ikhwān al-ṣafā'*, Bayrūt: Dār Ṣādir, [n.d.], v.2, pp.46-51.

- (22) サブザワーリー欄外注pp.719-720は、天体の数は有限であり、無限のものは有限のものと関係をもたない、と述べ、「言ってやるが[§]いい。「仮令海が[§]、主の御言葉を記すための墨であっても、主の御言葉が尽きない中に、海は必ず使い尽くされよう。たとえわたしたちが[§](他の)それと同じ(海)を補充のために持っても。」(Q.18:109)を引く。

